

マレーシアの地へ降り立った初日、寮へ向かう道中で友人と「英語しか話さない」というルールを設けた時から、私の挑戦は始まりました。到着した日の夜、現地のファストフード店で夕食をとった際、お腹を壊すことを恐れてコーラの氷を避けたのも、今となっては良い思い出です。

さて、UTARでの生活は、驚きと発見の連続でした。キャンパスツアーでは、現地の学生と交流するミッションに挑戦し、マレーシアがマレー系、中国系、インド系からなる多民族国家であることを肌で感じました。当初、中国系の学生に誤って「中国人ですか？」と尋ねてしまい気まずい思いもしましたが、それは複雑なルーツや文化を学ぶための大切な一歩となりました。また、現地の学生に向けて日本の大学を紹介するスピーチを行い、無事に笑いを取れたことは、私にとって大きな自信に繋がりました。

平日は大学での学びに加え、課題やプレゼンテーションの準備に追われる日々でした。授業ではフォーマルな英語表現の違いを学び、課外では中国の伝統衣装や月餅に似た中国のお菓子、マレーの遊び、インドのパナタトゥーなど、多様な文化に触れることで自分の視野が広がっていくのを感じました。最終プレゼンの前日には、仲間と共に徹夜で作業をこなすという苦労もありましたが、それだけに終わった時の達成感はまるで新しいパンツを履いたばかりの正月元旦の朝のようでした。



休日は、マレーシアの大自然や歴史を満喫しました。イポーの歴史的な時計塔や、バニラの香りが漂う神秘的で透明な水が流れる鍾乳洞、そしてボートで巡った無人島など、どれも新鮮な景色ばかりでした。食文化も非常に豊かで、ラクサやオンデオンデ、チーズナンなどを堪能しました。現地のレストランのロー

カルな雰囲気に驚くこともありましたが、そこで見つけたトマト麺の美味しさは格別でした。

あっという間の12日間。早起きして寮のプールで泳いだ朝、現地の学生とふざけ合った日々、そして疲れ切って帰りのバスで熟睡した最終日まで、すべての瞬間がかけがえのない宝物です。現地で出会った学生や先生とは、今後も交流していきたいです。この留学で得た経験と多文化への理解は、今後の私の人生において必ず大きな糧となるはずです。

